

古窯調査報告がまとまる

宮津・板山地区内の古窯発掘調査報告がまとまりました。今回の調査で中世（平安時代末期）に作られたと推定される「長頸三筋壺」と「注口」が見つかりました。知多半島の出土遺物の中でも希少で、町の文化財として、また学術的にも大変価値を持つものであると考えられます。



長頸三筋壺

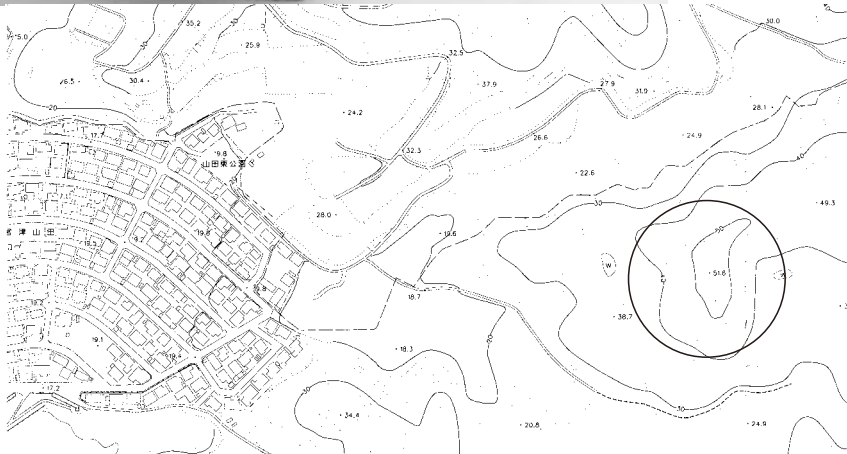
調査の結果、三つの窯を発見しました。窯に付着する焼土から年代推定を行う「残留磁化測定」では、一〇八五年～一三三〇年（平安時代末期）鎌倉時代）ころの窯であること

今回発掘調査を実施した宮津板山F古窯址群（Fは発見された古窯をアルファベット順に任意で付けた記号）は、阿久比町の東端、半田市の大矢知地区との隣接した小丘陵の尾根伝いに位置しています。

平成十九年名古屋鉄道株式会社が

施工した宮津板山土地区画整理事業の開発に伴い発見されました。同年十二月二十二日から二十九日までの八日間、福岡猛志日本福祉大学教授を団長に町埋蔵文化財研究員と町教育委員会が発掘調査を行いました。

注口



宮津板山F古窯址群位置図

発掘調査を実施した現場は、現在整地されて窯跡を見ることはできません。

が分かりました。ちょうど「阿久比谷虫供養」が始まったとされる時代に近いころだと思われます。窯内やその付近からは、「甕」「壺」「長頸三筋壺」「碗」「皿」などが見つかりました。甕に三ツ巴文と三角形を組み合わせた「押印文様」があることも分かりました。その中でも「長頸三筋壺」と「注口」は知多半島では、ほとんど出土例がありません。